

○中村朝子・玉城盛俊・首藤亜耶乃・恩田聡・渡辺慎一<sup>1)</sup>  
(沖縄農研・<sup>1)</sup>九州沖縄農研久留米)

【目的】

沖縄県は、アスパラガスが年中萌芽可能な気象条件であるが、端境期（11月～2月）の収量は少ない。その対策として、夏秋期に追加立茎により光合成生産量の増加を図り、親茎更新を行うことで端境期の生産性向上が期待できると考えられる。そこで、6月中旬から追加立茎を開始した株を時期別に親茎更新し、親茎更新時の貯蔵根への養分蓄積および端境期の収量性について検討した。

【材料および方法】

試験は、沖縄県農業研究センター内 H 鋼ハウスで行った。品種は「ウェルカム」を供試し、35Lポットに定植した2年生株を用いた。2015年6月12日に、成茎数を径5mm以上の茎4本/株に調整後、追加立茎を開始し、追加立茎期間中に萌芽した若茎はすべて放任した。親茎更新は、8月下旬（8月21日）、9月下旬（9月24日）、10月下旬（10月24日）の3時期に分けて行った。親茎更新後は全期立茎により4本/株を立茎し、その他の若茎は収穫した。

試験規模は1区8ポットの3反復とし、追加立茎開始時および親茎更新時の貯蔵根糖度、地上部・地下部乾物重、追加立茎期間および親茎更新後の萌芽本数の推移、収量を調査した。

【結果および考察】

追加立茎開始後、9月下旬更新区で貯蔵根糖度が最も低下し、10月下旬に増加する傾向がみられた（図1）。親茎更新時の地上部乾物重は、9月下旬に増加し、貯蔵根糖度が増加傾向にある10月下旬とほとんど差がみられなかった（図2）。

萌芽本数の推移では、すべての区で親茎更新後の萌芽本数が増加し、その後約半月～1ヶ月程度

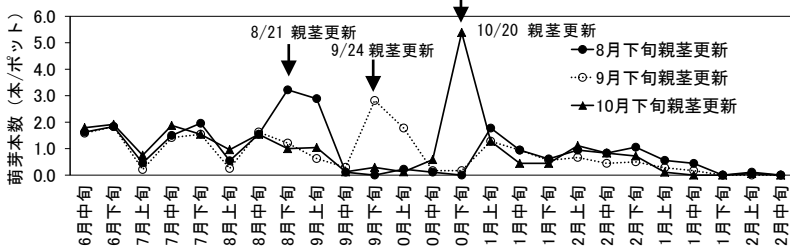


図3 追加立茎期間および親茎更新後の旬別萌芽本数の推移 (n=3)

で萌芽本数が減少した（図3）。端境期（11月～2月）の収量について、8月下旬、9月下旬、10月下旬の順に高い傾向がみられ、11月の収量は8月下旬、9月下旬親茎更新区が10月下旬親茎更新区と比較して有意に高かった（図4）。また、すべての区で2月の収量が得られなかった（図4）。

以上の結果、貯蔵根糖度の端境期の収量への影響は判然としなかったが、11月の収量を確保するためには、10月下旬以前の親茎更新が望ましいと考えられた。しかし、すべての区で親茎更新による萌芽本数の増加が確認できたため、今後は端境期を含めた親茎更新時期について検討する予定である。本研究は、農林水産業・食品産業科学技術研究推進事業「積極的な光合成産物蓄積手法と萌芽制御によるアスパラガス長期どり新作型の開発」により実施した。

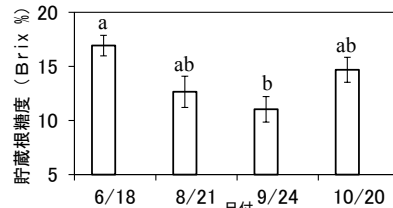


図1 追加立茎開始時および親茎更新時の貯蔵根糖度  
エラーバーは標準誤差を示す (n=3)  
Tukeyの多重比較により、異符号間に1%水準で有意差あり

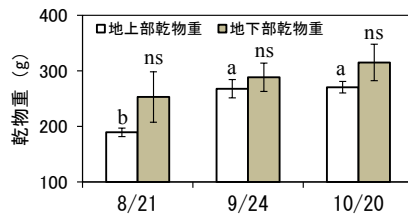


図2 親茎更新時の地上部・地下部乾物重  
エラーバーは標準誤差を示す (n=3)  
Tukeyの多重比較により、異符号間に5%水準で有意差あり、nsは有意差なし

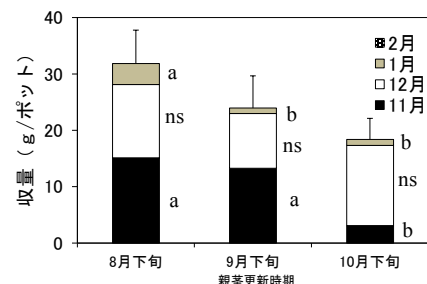


図4 親茎更新時期が端境期（11～2月）の収量に及ぼす影響  
エラーバーは標準誤差を示す (n=3)  
Tukeyの多重比較により、同月親茎更新間の異符号間に5%水準で有意差あり、nsは有意差なし